

中等8回生、卒業!

第8回卒業証書授与式が3月1日に行われ、中等8回生の108人が門出の時を迎えました。これで中等教育学校の卒業生数は1,151人になりました。

最後の2年間は学校行事が開催できないなど、制約の多い中で中等生活となりましたが、皆で工夫を凝らし、思い出に残る6年間で過ごしたようです。その思い出を胸に、次の舞台へと飛び立ちました。



門凜華さん、藤本佳昭先生、貝原汰一さん
(左から)

8回生学年幹事より

■貝原 汰一さん

学年幹事になりました貝原です。8回生は粋な人が集まった学年です。私たちの中等生活は山あり谷ありの6年間であり、特に最後の2年間は周知のとおり貴重な高校生活が制限されてしまいました。しかし、そのような環境においても8回生は屈することなく前進し、新たな行事の運営やMVの作成など、普段の学校生活のもとにおいては成し得なかったことを実現させてきました。8回生の、憂悶の日々さえ好機と捉え進歩していく「粋」な姿は、一員である私から見ても素晴らしいものと感じ、誇りに思います。そのような8回生の皆さんとともに6年間で過ごせたことを幸せに思います。卒業後もこの力と経験を遺憾なく発揮し、光り輝く未来を築きましょう!

■門 凜華さん

みなさん、こんにちは。同じく学年幹事になりました、門です。卒業してから1ヶ月が経とうとしていますが、みなさんいかがお過ごしでしょうか。

附属は私にとって「かけがえのない仲間との出会いの場」です。部活動の先輩方や後輩達、お世話になった先生方、そしてどんな困難も共に乗り越えてきた8回生。沢山のひとと出会い、濃い中等生活を送ることが出来ました。附属で過ごした6年間で振り返ると、改めて「附属で良かった」「8回生で良かった」と感じさせられます。きっとこの先、附属を思い出す度にそう思うのだろう、と思います。そして、そう思える仲間と出会えたことに感謝しています。

またいつか、みなさんに会える日を楽しみにしています。

8回生の先生方より

8回生が行事運営の中心的存在となるはずの「兎原祭」や「体育祭」が中止となったのですが、新たな行事の実行委員会を立ち上げ、オンラインフェスという名称の祭典を成功させました。また、卒業制作実行委員が立ち上がり、卒業制作として、「僕らの道」というオリジナルの楽曲とミュージックビデオを作り上げました。

1 組担任 若杉先生より

とても聡明で、とても優しい君達は、それゆえにきっと将来、世界の不条理を背負い、時にひどく傷つくだろう。だが、そんな君達だからこそ、幸多き人生をその手で掴み取るに違いない！

2 組担任 中時先生より

いままで誰かがあなたのために一生懸命になってくれていたように、こんどはあなたが誰かのために一生懸命になってください。そんな人であってほしいと心から願っています。

3 組担任 軽尾先生より

素直さというのは、学びの最大の原動力である、そして、素直に学ぶ人は、しなやかである。卒業後も周囲の支えとなる「粋な人」としての活躍をお祈りしています。



大八木先生、岡本先生、軽尾先生、中時先生、若杉先生、藤本先生（左から）

■卒業生だより

秋田 慎平さん [中等4回生]

春の暖かさを感じる日々が増えてきましたが、皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでしょうか。お久しぶりです。4回生の秋田慎平です。

さて、みなさんはコップに入れておくと勝手に出てきてしまう不思議な液体があるのをご存知ですか。今回はそんな僕の大学での研究対象である「超流動ヘリウム」についてご紹介します。

まず「超流動」と聞いて、「超伝導」なら知っていると思った方も多いはず。実際、超流動と超伝導は似ているところが多いです。超伝導は、低温で「電気抵抗」がゼロになる現象のことを言います。それに対して超流動は、低温で「粘性」がゼロになる現象のことです。

粘性は液体の粘り気のことです。身のまわりのものだと、水のようにサラサラしたものは粘性が小さく、逆にハチミツのようにドロっとした液体は粘性が高いです。水のように一見サラサラな液体でも粘性はゼロではありません。つまり粘性がゼロの超流動ヘリウムは究極にサラサラな液体ということです。このサラサラの超流動ヘリウムは、どんなに細い管でも簡単に通り抜けてしまうという性質を持ちます。

冒頭のコップから勝手に出てきてしまう現象を説明するには、超流動ヘリウムのもう一つの性質を知る必要があります。具体的な例で考えてみましょう。コップに水を入れたとき、コップの壁付近で水面が盛り上がっている様子が観察できます。これは、水とコップの壁の親和性が高く、水が壁にくっついての方がエネルギー的にお得になるためです。一方、水銀をビーカーに入れると、壁付近で水面がへこんでしまいます。水銀は壁との相性が悪く、壁から離れた方がエネルギー的に得になるためです。壁との親和性が高いほど、水面の端は高くなっていきます。

では、壁との親和性がとてもとても高い液体ならどうなるでしょうか。少し盛り上がった部分はやがて



Shimpei Akita

中等4回生。大学進学後は、理学部の勉強とアメリカンフットボール部の文武両道。

壁の頂上まで到達してしまいます。しかし壁の頂上まで行っても少し盛り上がった部分は止まらずに、壁の頂上を越えて、コップの内側から外側までコップの表面すべてを覆ってしまいます。超流動ヘリウムは壁との相性がとても良いので、コップに入れるとヘリウムの薄い膜で表面をコーティングされたコップが完成します。

コップの表面をコーティングしたヘリウムの薄い膜は、コップ内のヘリウムの通路の役割を果たします。とても細い通路ですが、超サラサラな超流動ヘリウムは難なく通り抜けてしまいます。結果、コップ内のヘリウムはコップ表面の薄い膜を通してすべてコップの外に流れ出てしまうのです。

このほかにも超流動ヘリウムに関して、普段の生活ではありえないような現象がたくさん起こります。興味を持った方はぜひ調べてみてください。新しい科学にきっと出会えると思います。

最後になりましたが、広報紙のお話をいただいた時にはまだオリンピックも始まっていませんでした。つい2ヶ月前までは考えられないほどの目まぐるしい世界情勢の変化に驚きを隠せません。少しでも皆さんの心安らぐ日々が続くことを願っています。

■卒業生だより

垂井 大輔さん [中等7回生]

初めまして。

また、ごく一部の方はお久しぶりです。私を知っている後輩の方はほとんどいらっしゃらないと思いますので、スペースの無駄使いでしょうが自己紹介をさせていただきます。

自分は7回生、つまり去年コロナに見守られながら卒業した垂井大輔という者です。

このように7回生を代表して筆を執らせていただけたとは思ってもおらず、お話を頂いた時には大変驚きました。大した大学生活も送っておりませんが、ここで近況報告とさせていただきます。

私は現在、横浜国立大学という神奈川県のある大学に通っております。中等が山の上であり、毎日のように登山をしていたのを懐かしく思いたいところですが、残念ながら今も毎日登山をしております。「横浜」という地名を冠しているのも、さては海沿いの大都会にキャンパスがあるのかと淡い期待を抱いておりましたが、自分が想像していたのは神奈川大学みなとみらいキャンパスのようなものでして、実際は海が一切見通せない住宅地に建立しております。

さて、弊学の素晴らしい立地についてはさておき、僭越ながら今現在の自分の大学生活について書かせていただきます。

私は教育学部に進学し、社会科を専攻しております。しかし1年生の間は専攻に関係なく様々な講義を受講します。例えば、体育や家庭科などを大学でもう一度習います。中学や高校の時と違うのは、その科目を「教える」という立場に立った時、“どんな内容”を“どのように”教えるのかが講義の核となります。それゆえ、本質的に「教育とは」と考える機会が多々あります。しかし2年生からは打って変わって本格的に専攻について学べるとのことなので、非常に楽しみであります。

次に授業以外での大学生活としましては、高校の時から趣味として行っていた「キャップ野球」なるものを本格的にサークルとして始め、現在部員100人近くの団体で活動しております。近頃はチーム運営



Daisuke Sui

クラスでは副委員長として尽力。ペットボトルの「キャップ野球」ではテレビ取材を受ける。教育学部新2年生。

の総括を行なっており、右も左も分からずではございますが邁進しております。

非常に稚拙な文章ではありますが、ご清覧いただきありがとうございます。知性のかけらもない文章しか書けない私を、世間は許してくれるのかなと一抹の不安が残りますが、このような機会を頂けて光栄です。

それでは、皆様方の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

■先生だより

山崎 眞一郎先生

3月末で退職した山崎眞一郎です。退職の際に機関誌に投稿させていただき機会を頂きましたので、一言ご挨拶させていただきます。

私は、2009年4月に神戸市教育委員会との交流人事で赴任しました。人事担当者から「附属へ転勤」と聞いた時には何となくがっかりしたようにおぼえています。教科指導研究校だとかエリートが集まった学校だとかいう間違っただけの情報を信じていたからです。その年は、4月に赴任して6月までに研究授業をする必要があり、年内に4回の研究授業をするように命じられたので、「予想にたがわず〇〇な学校だ」と思ってしまいました。そんな時、助けてくれたのは教室で本来は導くべき生徒の皆さんでした。教育実践研究を志していたわけではなかった私の拙い授業をうまくまとめ、研究授業として何とか形にしてくれたのはまさに生徒の皆さんの力でした。確かに附属の先生方は大した力量の方が多かったのですが、「共に学ぶ」ことを旗印に掲げていた私には生徒の皆さんの協力こそが助けであり、糧でありました。それを悟った私は、誰よりも生徒寄りの立場を附属に努めている間ずっとそしてこっさり堅持したと思っています。

前任校はサウジアラビアの首都リヤドの日本人学校で、砂漠から帰国したばかりだったので、緑に囲まれた附属の環境も辞めずに勤め続けられた要因です。校舎北側の校地でまさに舞い散る枯葉の様子は美しい日本の光景を次々と彷彿させ、不覚にも涙が出ることもありました。その後1回生・3回生の皆さんにお世話になりました。このころの話は筆舌に尽くしがたいものがあり、ちょっと思い返すと顔が赤くなるようなこともありました。しかし、本当に懐かしく思い出されます。

2019年4月に神戸市立本庄中学校を退職して再度赴任しましたが、離任する2022年の3月で計12年勤めることになり、私の教員人生の中で最も長期の勤務校になりました。大きな人生の転機が附属中等教育学校にあったことは本拙文を読み返すと明白です。新しい勤務校でも「附属の威を借る山崎」を遺憾なく発揮して、襲い来る困難な状況を脱出して毎日をやり過ごしています。週一国語の12回生・13回生、修学旅行を2回も一緒に行った9回生の皆さまとはなかなか離れがたい感もありました。卒業生の皆さま・在校生の皆さまのご活躍を祈念し、お世話になった皆様に感謝を申し上げ、ご挨拶とします。ありがとうございました。



Shinichiro Yamasaki

2009年本校に赴任、3回生の学年主任や生徒指導部長を担う。2年間神戸市立中学校に在籍後、2019年度より本校副校長。

■先生だより

大八木 優子先生

卒業生の皆さま、お久しぶりです。いかがお過ごしでしょうか。

本校では3月に8回生の卒業式が挙行され、108名の卒業生が巣立ちました。8回生の進路状況については、ご存じの方も多いかもかもしれませんが、東京大学や京都大学へ進学する生徒の数が過去最高となりました。そして、特別選抜による国公立大学への進学者も、今年の7回生同様、数多く見られます。(※詳細は本校ウェブサイト「進路・進学サイト」)

これらの結果は、卒業生である皆さんがこれまでに築いてきた歴史において、その一端が担われています。特別選抜入試においては、東京大学のアドミッションポリシーにあるように「学校の授業の内外で、自らの興味・関心を生かして幅広く学び、その過程で見出されるに違いない諸問題を関連づける広い視野、あるいは自らの問題意識を掘り下げて追究するための深い洞察力を真剣に獲得しようとする人」が求められています。卒業生の皆さんは、本校の教育活動において、KPでの卒業研究、兔原祭を始めとする学校行事に心血を注いで取り組んでこられました。皆さんが築いてくださったこれらの歴史が、後輩へと引き継がれ、現在、多方面から注目を浴びる学校へと飛躍しています。

学校の様子は時の流れとともに変容を遂げています。一見、革新されたように思われるものにも、そこには皆さんが築いてくださった歴史の片鱗が見られます。これらの歴史に私たちは敬意を払っています。失われたものに、もの寂しさを感じることもあるかもしれませんが、卒業生の皆さんにも時には学校に足を運び、その様子を見てもらえたらと願っています。

皆さんも、4月を迎え、新しい環境(配属・立場)に身を置いている人が多いのではないのでしょうか。本校を卒業し、人生の新たなステージで活躍されている皆さんへ、次のメッセージを送ります。6年生の春休み課題“Who Moved My Cheese?”からの一節です。

“He (Haw) knew when you change what you believe, you change what you do. You can believe that a change will harm you and resist it. Or you can believe that finding New Cheese will help you, and embrace the change. It all depends on what you choose to believe.”

- Spencer Johnson M.D. , “Who Moved My Cheese”

人は考えが変わると、行動が変わるのだ。変化は害を与えるものだと考え、それに抗う人もいる。だが、新しいチーズをみつけられれば変化を受け入れられるようになる、と考えることもできる。すべて、どう考えるかにかかっているのだ。(『チーズはどこへ消えた』より引用)



Yuko Oyagi

2013年4月に本校に着任。中等3、7回生のクラスを担当し、現在は入学適性検査推進室長および学務部進路課長を兼任。

学校NEWS 短信

3人の先生が離任される

2022年3月をもって、3名の先生方が母校を離任された。

▼離任された先生方

山崎 眞一郎先生	神戸龍谷中学校高等学校へ
永野 和美先生	大阪公立大学へ
立花 佳澄先生	神戸市立渚中学校へ

山崎副校長は2009年、本校に赴任。2年間中等を離れる期間があったが、計12年間在籍され、

多方面で中等の発展に尽力された。

永野先生は附属住吉小学校から給食を担当。中等では食育やKPの指導などを通して、生徒の食への理解向上に貢献された。

立花先生は2013年に本校に赴任し、9年間教鞭をとられた。国語の授業や部活動の顧問として、幅広く生徒の活動を支えていただいた。

14回生121人の入学が決まる

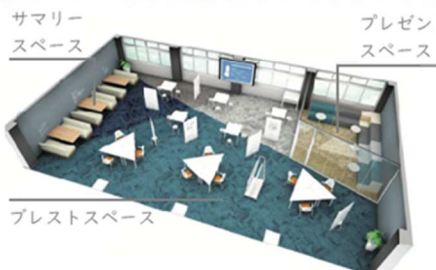
中等として8回目の入学適性検査が1月18日に実施され、21日に121人の合格が発表された。4月に14回目の入学生が、母校の後輩に加わる。

～同窓会からのお知らせ～

■ 寄附のお願い：給食終了に伴い、給食室が学習スペースに改装されます。同時に図書室もより使用しやすい仕様にリフォームされます。母校より、その整備費用に充てるための寄附のお願いが届いています。積極的にご協力頂けると幸いです。

Learners' Agora (仮称) 設置

■活動ごとに場所を選択しながら学習する場



■ライブラリ：閉塞感を感じさせない読書空間

現給食室・図書室を学習スペースに改装

- ・ 自治的活動
- ・ 協同学習
- ・ 探求活動

後輩の中等生のために、
ご協力お願いします！！

金融機関での払込か、インターネットを介して、1口5,000円より受け付けています。

右のQRコード、または下記のURLより寄附のページに進むことができます。



<http://www.schools.kobe-u.ac.jp/donations.html>

■ 本広報誌に関するお問い合わせ：「あの先生/先輩の話を聴きたい」、「こんなトピックを取り上げて欲しい」などの要望や、本号を読んだ感想を下記のフォームにて受け付けます。どしどしご投稿ください。

【編集後記】

「陽菊」は第4回を迎えました。原稿にご協力いただいた皆様、貴重なお言葉をありがとうございました。読者の皆様の心に、深く刻まれることと存じます。また、本紙は新生活が始まるタイミングでの発行となりました。皆様が良い船出を迎えることを、心から願っております。

では、また次号でお会いしましょう。(6回生横田)

お問い合わせフォーム

■ 同窓会の活動に関して



<https://forms.gle/JyN9kAfL5IEN4boi7>

■ 広報紙に関して



<https://forms.gle/PRyVcpmkeqy4ALDy5>

(次号は6月30日発行予定です。)